

レコード芸術

2015

12

Vol.64 No.783

読者と
本誌執筆陣が選ぶ

2015年 **ベスト・
ディスク・
ランキング**
投稿募集

締切迫る!

Artist of the Month

レイフ・オーヴェ・アンズネス

4シーズンにわたった
壮大なプロジェクト
「ベートーヴェンへの旅」の
達成で得たものとは

[特集]

BOXセット大集合!!

一生もののコレクション・ガイド

[連載] 宇野功芳の見たり、聞きたり(最終回)



特製CD付

濱田滋郎 ● Jiro Hamada

推薦 清水和音とベートーヴェン、と言えば、かつて1990年代の全ソナタ連続演奏会、それに伴う、ライヴ録音CDによる全ソナタ集のリリースが頭に浮かぶ。以来、ほぼ20年を経て、こんどはスタジオ録音により、清水のベートーヴェンを聴けることになった。「ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ集1」とあるので果たして全集になるのか否かは判らないが、ともかくもその第1弾は、真向から《悲愴》《月光》《熱情》である。何気なくこれを——名曲集だからと——耳にした人は、あるいは強い印象を与えられないかもしれない。清水はここで、曲を「おもしろく聴かせよう」とする手練手管のようなものを、何も用いていないからである。音色にしても、華麗とか艶美とかの言葉は浮かばせない、むしろつや消して質朴なトーンを基調にしている。しかし、その中で、彼はピアノの動く庄倒する響き、柔らかに温雅な響きを、さまざまなグラデーションを伴いながら、楽曲のフレーズごと、音ごとに、実に周到に使い分けている。淡い、大人の芸である。楽譜をありのままに再現して、けれども味は少しもないが、却って味わい深い、練達の演奏と云うほかない。そうした意味合いからあえて3曲に出来栄え上の順位をつけるなら——聴き手の感じ方にもよるが——、私は《熱情》《悲愴》《月光》の順とする。と言って《月光》にも不満はない。「噛めば噛むほど……」ではないが、聴き返すたびに味の深まる演奏であること疑いない。

濱田滋郎 ● Jiro Hamada

推薦 言うまでもないことと思うが、児玉麻里と児玉桃とは、すぐれたピアノリスト姉妹である。2人のうち妹の桃はこ何年かのあいだにも幾度か実演に触れたが、姉の麻里はヨーロッパでの活動が主であるせい、あまり演奏会場の舞台には見えない。とはいえ、麻里はかつて2003年からは日本で「ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ全曲演奏会」を持つていたこと、たいへん個人の運のめぐり、あるいは心がけが悪かっただけなのかもしれないが、ここに現われた、ディスク上における彼女の「ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ全集」は、2003年から2013年にかけて、10年余を費して録音した。ラ

CD 22



THE RECORD GEIJUTSU 特選盤

■ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第8番《悲愴》/同第14番《月光》/同第23番《熱情》

清水和音(p)
[トクトーン]OVCT00118]
CD&SACD ¥3200

山之内正 ● Tadashi Yamanouchi

録音評 鮮明な粒立ちとハーモニーの美しさが見事に両立した優秀録音。距離感が自然で、ホールの空間全体がきれいに響いている感じが自然に伝わる。特にSACD層は低音の透明感が高く、空間を満たす空気が素早く動く様子を生々しい感触で聴き取れた。SACDのもうひとつのメリットは、何でも音場が混濁せず、和声とリズムの構成が鮮やかに浮かび上がってくることで、CDに比べてダイナミック・レンジの余裕がものを言っている。残響は低音から高音まで響き均質で、直接音と間接音がきれいに溶け合っている。(94/94)

ンパーを上げたままという作曲家の指示が実現しているし、《熱情》も淀みなく流麗、緻密に音楽を組み立てて、壮大な音の建築物を作り上げることに成功している。

那須田務 ● Tsutomu Neaeda

推薦 海外のレーベルが邦人音楽家の演奏を録音し、輸入盤や国内盤として出るケースが多くなった。これもそう。といっても、児玉麻里は6歳で渡欧しているから海外育ち。14歳でパリ国立音楽院に最年少入学。ムニエ、ニコラーエフ、ブレンデルらに師事してブルミエ・ブリで卒業。19歳でマスター・コースを了えている。その年にロンドン・デビュー、1995年にカーネギー・ホールにデビューという国際派だ。そんな児玉麻里によるベートーヴェンのソナタ全集である。収録曲は順不同だが、初期のソナタから述べる。第1番の第1楽章から丁寧に弾き込まれ、リズムやアーティキュレーションが明快。ピアノの響き

那須田務 ● Tsutomu Neaeda

推薦 清水和音のベートーヴェンの新シリーズが始まった。清水は1995年秋から97年7月にかけて行なった計8回のコンサートでベートーヴェンのソナタ全集を演奏し、そのライヴ録音がソニーからCDでリリースされている。それから20年を経て改めてベートーヴェンのソナタに取り組んだのだが、今回は待望のセッシヨン録音である。第1集は一般に人気の高い《悲愴》《月光》《熱情》。第1楽章の序奏、モダンなグランド・ピアノの重厚な和音が厳かに響き渡る。主部は整然とした音の運びとがしりとした構成で勇壮の上なく、第2楽章の「歌」には英雄様式の音楽にふさわしく、ヒューマンな温もりと感動がある。終楽章も速すぎず、遅すぎず。アゴギクもつけないし、対比の強調も派手な身振りもない。特に人と違うことをするわけでもないから目立たないが、これほど存在感のある演奏もない。解釈はオーソドックスだが、何度聴いても飽きさせないのは、しつとりと落ち着いたタッチ、丁寧な楽譜の読みと弾き込み、入念な仕上げ、テンポも含めたあらゆる表現の抜群の安定感ゆえのこと、それがこのベートーヴェンにある種の風格と気品を与えているのだ。それは他の2曲にも言える。《月光》の第1楽章は響きの扱いが巧みで、弱音で



THE RECORD GEIJUTSU 特選盤

■ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全集

[全32曲]
児玉麻里(p)
[ペンタトーン]KKC5480~88(9枚組)]
CD&SACD ¥12000

イフワーク（の一環）にはかならない。すなわち、一気呵成に勢いで仕上げたものではなく、1曲1曲を吟味し噛みしめながら慎重に進めた歩みの結晶にはかならない。全部で9枚のディスクは、けっしてソナタの番号順に並んだものではない。以下に、ディスク1から9までに含まれる曲目の内訳と、録音の年代とを、まず記しておく。

CD 1 作品53 (ワルトシュタイン)、作品57 (熱情)、作品81 a (告別) —— 2003年

CD 2 作品27、2 (月光)、作品7、作品22 —— 03、04年

CD 3 作品2、1、3 —— 08年

CD 4 作品13 (悲愴)、作品10、1、3 —— 03、04年

CD 5 作品31、1、作品31、2 (テンペスト)、作品31、3 —— 04年

CD 6 作品26 (葬送)、作品27、1、作品28 (田園)、作品90 —— 12年

CD 7 作品14、1、2、作品51、作品49、1、2、作品78、作品79 —— 08、10、12年

CD 8 作品106 (ハンマークラヴィア)、作品101 —— 13年

CD 9 作品109、作品110、作品111 —— 11年。

以上の一覧でおわかりのように、配列は録音順とも限らない。全体として、初・中期の各ソナタは2004年頃までに、また後期もしくはそれに近いものは2008年以降に録音されたようだが、一概には言えない。ただし、作品101以降の後期ソナタはやはり全集が仕上げに入る頃に至って録音に踏み切られており、児玉麻里が己の成熟を待っていたのであったろうと推察できる。録音はすべてオランダ (ファルテルモントあるいはハールレム) で行なわれており、スタインウェイのD274を使用している。

さて、演奏は、全体として非常に高い水準を行くものだとさえ言えよう。パリ音楽院に学んだことのほか、児玉麻里の師としてはタチアナ・ニコラーエワやアルフレート・ブレンドルの名が挙げられているが、彼女のピアノニズムはとりわけロシア流とか、ウィーン風とかではないと思われる。たいそう周到な技術を身につけているが、彼女の追求するものは——表現上のことも含めて——「技巧」ではなく、「音楽」そのものである。全体を通して聴くと、彼女が演奏上のさまざまな教義からは離れたところに身を置き、結局は己のうちに培った感性そして音楽的知性・徳性に従って演奏を創ってきた人であることがよく分かる。ひとつの言い方をすれば、当集において彼女は音楽に込められたベートーヴェンの人間性を弾き表わすことに重きを置き、そのことがそのまま、彼女自身の人間性を弾き表わすことにつながっている。音楽に込められた人間的なあたたかさ、感じやすさと詩情の豊かさ、それはおそらく間違いなく、彼女の人格に（私自身は全くそれを知らぬが）つながっている、という気がしきりにする。

歌崎和彦 ● Takahiko Utsaki

〔録音評〕2006～2013年にベートーヴェンのピアノ協奏曲全集をピアノ録音した児玉麻里によるソナタ全集。2003～2013年の録音で、後期のソナタを中心に聴いたが、CD層は多少近い印象はあるが、演奏はバランスよく捉えている。しかし、SACD2chは個々の音に表くっつきや抑えがきく、繊細な響きも対応しているが、多少響きが多めな印象はあられるが、音の純度は高く、最も好みを分けるか多少暖かさも高くなるが、音の精度とバランスは音の精度と欲しかった。〈91/92/92〉

を抑え、テンポをあまり揺らさない。師の一人ブレンドルの顔が想起されるが、それはこの楽章くらい。第2楽章も古典的な曲に相応しく表現はシンプルながら、よく歌うし、わずかなアゴキクが音楽に生き生きとした表情を与える。第2番の第1楽章は各部分の連関が自然。第2楽章は落ち着きのある足取りで、声部による音色の弾き分けが見事だ。そしてスケルツォの軽やかさ、鮮やかな色彩感がすばらしく、ロンドの流れるようなパッセージが面白い。カラフルな音色はロンドも同様。この上なく優美で温かい。第3番以後の曲は感覚的で即興的な趣がある。第3楽章も一筆書きのようにフレーズが繋がる。初期では他に第4番がいい。第1楽章は指巡りがよくて、リズムは生き生きとして愉悅に溢れる。一方第2楽章は静かで落ちついていて深い情趣に満ち、前楽章と対比づけられる。多層的な主題の弾き分けも見事だ。第3楽章はメヌエツトともスケルツォともつかないが、特に前半はミスティアスな雰囲気と性格がよく出ている。《悲愴》冒頭はそれほど衝撃的ではなく、むしろ弱音が際立っている。主部はリズムの歯切れがよくエネルギーに満ちているが、音色は柔らかく、中間的な色彩が豊富だ。第2楽章は穏やかによく歌い、中間部からの動きと自然な高揚が感動的だ。《ワルトシュタイン》の第1楽章には自然な勢いがあり、イントロドゥツィオーネからロンドへの移行はさりげない。ロンドのカラフルな色彩とふわふわとしたアトムスフェレが楽しい。《熱情》では安定した構成が示され、同時に多様な色彩がすばらしい。運命の動機も全体の流れの中に収まっていてそれだけがわざとらしく強調されることはない。生き生きとした情感はたとえば、《告別》の喜びの爆発する終楽章などに聴かれる。

《月光》の第1楽章は柔らかなアティキレーションと情感が快く、第2楽章も静かで優美なダンスのようだ。終楽章は速いテンポで緊張感に満ち、テンペラメントが豊か。《テンペスト》は柔らかな音色でファンタジーに溢れ、第1楽章の再現部の前の静かな箇所や第2楽章が印象的。とりわけ後者は途絶えがちな会話を彷彿とさせる。《田園》第1楽章のふくらみのある豊かなサウンドはオーケストラの響きを連想させる。第2楽章もメリハリの効いたアティキレーションで気分と色彩を変え、《ハンマークラヴィア》の第1楽章の冒頭はきれいに和音が鳴っている。迫力はいまひとつだが、シンフォニックな味わいがあり、情感の質が多様でここでも静かなところが魅力的だ。最後の3つのソナタも重厚荘厳とは違う、彼女ならではの個性と色彩に染められている。第30番の第1楽章は乾いたタッチでテクスチュアがはつきりと示され、第31番もカラフル。第32番の第1楽章も同様。終楽章の変奏のジャジーなりズムが楽しく、力強くスウィングしている。総じて、軽やかでしなやかな精神と歌、豊かな色彩に溢れたベートーヴェンである。